

# 雑草対策工法比較一覧表

工 法	防草シート (ウィードシールド)	コンクリート	砕石 (砕石：C-40)	種子ふきつけ	除草剤散布	草刈
イメージ図						
工法の特徴	ポリエステル繊維素材をシート状にし、遮光性、強度で雑草発生を抑える工法。敷設はピンで打設して固定する。	除草、整地後に、ミキサー車でコンクリート流し込み、表面部を均す工法。	重機などを用いて現地に砕石を設置、敷き均す工法。	種子、保水材、肥料、展着剤などを土壌表面に吹きつける工法。	(茎葉処理型)希釈した薬剤を、定期的に散布する工法。 (土壌処理型)土壌に散布し、雑草の発生を予防する工法。	機械除草(肩掛式)→集草→積込→運搬→焼却
施工性	軽量で施工性に優れ、狭い現場でも施工が可能である。比較的天候に左右されずに作業が可能。	工法自体シンプルだが、重機侵入が必須のため、場所による制限がある。傾斜部分では型枠などを用いる必要あり。	重機使用が可能なら施工は容易。	専用機械を用いて広範囲を短時間で施工することができる。	1回の作業は容易だが、周辺への飛散等に気を配る必要がある。	作業は単純だが、飛び石や構造物の配置によっては注意が必要となる。
評価	○	○	○	◎	○	○
景 観 性	色彩が人工的になるため、他工法と比較した場合、景観性に若干劣る。	人工的な印象。照り返しもあり、景観性は良くない。	色彩は人工的だが、落ち着いた印象となり景観性はますます。	維持管理が成り立てば、期待する植生状況となるため、景観は最も良くなる。	茎葉処理剤の場合、枯れた状態の草が残るため、景観は良くない。土壌処理剤は雑草発生抑制するため、自然景観に近い状態となる。	自然の景観である。
評価	△	△	○	◎	○	○
防草性	シート自体の強度と遮光能力で雑草が発生しないよう抑止する。隙間からの雑草も、補助資材用いて抑止可能。	硬いコンクリート層で雑草発生を防ぐ。構造物隙間などの目地部分から草が生えてくる可能性あり。	砕石下の土壌部分から伸長する雑草を完全に抑えることは困難。砕石部分にも土壌が溜まってくると、より雑草が発生しやすくなる。	植物が被覆することで雑草発生を抑えることを意図しているが、吹き付けの肥料により雑草の生育も旺盛になるため、吹き付けのみでの防草性は低い。	茎葉処理剤は発生した雑草に対して枯らす効果のため、発生自体を抑える効果はない。土壌処理剤は土中に処理草をつくり、雑草の発芽を抑止する効果が見込める。	発生した雑草を対処的に刈り取る工法のため、雑草の発生自体を抑止する効果は無い。
評価	◎	○	△	△	○	△
持続性	施工現場・条件で左右されるが耐久性は10年以上。シート自体の自然劣化や土の堆積などの外部環境による変化はあるが、軽微なメンテナンスを継続することで“防草効果”の長寿命化を図れる。更新も比較的容易。	耐久性は20年以上と、非常に優れている。ただ、時間経過や振動などによりひびわれ生じることもある。	砕石自体の耐久性は高いものの、雑草は発生し、根本対策を行わない限り発生量は年々増加する。除草の際の飛び石を懸念する場合は機械刈りが困難となり、高コストとなる。	草種選択、播種時期、前処理、メンテナンスの方法などを誤ると、維持することは困難。繰り返しの施工が必要となるケースもあり、持続性は低い。	茎葉処理剤は散布した際に生育している雑草にのみ効果。土壌処理剤はある程度発芽抑制効果持続するが、他工法に比べると短期的な効果しか見込めず、持続性は低い。	雑草が発生するたび、障害にならないうちに実施する必要がある。持続性は低い。
評価	◎	◎	△	△	△	△
総合評価	強度の面では他工法と比較すると劣る箇所はあるが、頻繁な車両、人の通行が無ければ問題ない。防草工法の中では施工性、経済性に優れ、多分野、多現場でフレキシブルに使用される。	持続性に非常に優れる工法。ただし、発電運用中に掘り返す必要が生じた際や、20年経過後に現状復帰が必要となった際には障害となる恐れもある。	降雨等による砕石の流動や、平地のみの施工で条件に制限される。また、雑草の飛来種子対策にはならず、着根、生育するので定期メンテナンスは必要である。	種子散布により単一植生の維持が成功すれば費用対効果は最も高くなるが、実現は困難。雑草が繁茂し、余分な対策が必要になることもあるため、実施には注意が必要。	1回の作業が容易なため、条件が整えば効率的な管理が可能。ただし、草種が多種にわたると生育時期、有効薬剤も異なってくるため、管理困難となるケースもある。	年2回程度の草刈作業は一時的な対処であり、雑草の種類が変化していくことにより、より対応困難な状況になっていく恐れがある。
評価	◎	○	○	○	○	○